

Possible association between early formula and reduced risk of cow's milk allergy: The Japan Environment and Children's Study

手塚, 純一郎

<https://hdl.handle.net/2324/4475225>

出版情報 : 九州大学, 2020, 博士 (医学), 論文博士

バージョン :

権利関係 : © 2020 The Authors. Clinical & Experimental Allergy published by John Wiley & Sons Ltd. This is an open access article under the terms of the Creative Commons Attribution-NonCommercial License, which permits use, distribution and reproduction in any medium, provided the original work is properly cited and is not used for commercial purposes.



氏 名：手塚 純一郎

論 文 名：Possible association between early formula and reduced risk of cow's milk allergy: The Japan Environment and Children's Study

(乳児期早期の育児用調製粉乳の摂取は牛乳アレルギーのリスクを低減する可能性がある：子どもの健康と環境に関する全国調査)

区 分：乙

論 文 内 容 の 要 旨

【背景】ピーナッツおよび卵タンパク質に早期に定期的に曝露することでアレルギーに対する保護的な効果があるという証拠があるにもかかわらず、牛乳タンパク質に曝露する最適なタイミングは不明である。

【目的】この研究では、1歳までのどの期間時期の育児用調製粉乳（ミルク）摂取が牛乳アレルギーのリスク低下に関連しているかを検討する。

【方法】10万組以上の母子が参加する全国出生コホートであるエコチル調査のデータを使用した。①乳製品に対するアレルギー症状、②ミルクを含めた乳製品をアレルギーの評価時期に非摂取していないこと、③食物アレルギーの医師の診断、の3つを満たす場合を牛乳アレルギーと定義した。暴露要因は、母乳摂取の有無に関わらず、ミルクの①開始時期、②生後0-3か月・3-6か月・6-12か月時の摂取状況とした。

【結果】牛乳アレルギーの罹患率は6か月時に0.23%、1歳時に1.03%であった。多変量解析では、生後3か月までのミルク開始は、1歳時の牛乳アレルギーのリスク低下と関連していた。また、3-6か月時の日常的な摂取はリスク低下と強い関連があったが（リスク比[95%信頼区間]: 0.22 [0.12-0.35]）、0-3か月時の摂取には関連がみられなかった（1.07 [0.90-1.27]）。

【結論】生後3か月以降のミルクの日常的な摂取は、生後12か月の牛乳アレルギーの減少と関連している。生後3か月以前の早期のミルク摂取が牛乳アレルギーに与える影響は、摂取期間が短いと消失する可能性があることが示唆された。しかし、この研究は観察研究であるため、現時点でミルクの摂取の使用を推奨するものではなく、今後の無作為化対象試験が必要である。